

平成28年度 第2回 岡山県社会教育委員の会議

平成29年3月14日（火）

1 開 会

開会 あいさつ

- ・岡山県社会教育委員の会議 議長 濱 田 栄 夫
- ・岡山県教育庁生涯学習課長 中 本 正 行

2 説 明

(1) 平成28年度主要事業の成果等について

一括説明 中本生涯学習課長

質疑応答

委員

生きる力応援プラン「夢さがしの旅」推進事業は長く続いているようだが、どのくらいになるか。

生涯学習副課長

平成13年度に国の委託で始まり、今年で15年目になる。

委員

実績にあるように延べ100名前後、参加しているのか。

生涯学習副課長

年度によって開催回数が違うが、およそ1回につき15,6名程度参加してる。

委員

保護者も同伴か。

生涯学習副課長

そうだ。それがこの事業の特徴である。

委員

(3ページの) 地域ぐるみで子どもを育てることは大きい課題だ。先般の県議会の一般質問でも申し上げたのだが、不登校の子どもの問題だ。生徒指導推進室がデータを出したのだが、県内の小学校で1,510人、中学校で2,413人、高校で1,631人、合計で5,554人の長欠欠席者がいる。本来ならば学校教育の中で守られていかなければならないと思うが、教育を受ける権利がありながら学校に行っていないという状況があり、最後は社会教育の課題として責任感をもって取り組むべきと思う。例えば、子どもたちを地域づくりの活動に参加させる際、学校と連携し、学校には行かないけれど地域づくりには参加できるような方向でこの問題に取り組んでいくことはできないか。「NPO法人ちみち」や「だっぴ」など、様々な社会教育団体がキャリア教育に取り組んでいる。その中で、不登校の子どもの参加させていくかなどに取り組んでいただきたいが、どう思われるか。

生涯学習課長

おっしゃるとおりで、社会教育の役目として、学校に行きにくい子どもの受皿としての役割は大きい。不登校の子どもを受け入れるNPOもあるし、様々な体験活動などのプログラムをもっているNPOも役割として大事だと思っている。事業として検討していくことも十分考えられる。

委員

他の部局でやっているところはないのか。自閉症カフェも聞いたことがあるのだが。

生涯学習副課長

岡山市は、岡山市少年自然の家で似たような取組をしている。倉敷市は、さわやかDAYで市内の児童を対象にした取組もある。矢掛町は、ボランティアグループが社会福祉施設等で事業をしている。4年前までは、社会教育施設や自治体と連携して実施しており、現在は形は変わってきているが継続しておこなっている。また、吉備高原のびのび学園では体験入学として長期休業中に施行していると聞いている。

委員

不登校の受皿のようなものはないのか。

委員

不登校支援員を平成29年度は120名配置すると聞いている。今更だが、憲法11条、13条、14条がありながら学校の楽しさや学校の意義を感じずに、家庭に閉じこもったり、人間関係を築けなかったりする子どももいる。本来は担任の仕事だと思うが、不登校支援員を増やしても解決になるのか。本当に支援がいるのは暴力行為。不登校にどう適切に対応するかは教師の愛情や情熱が大きいと思う。現実是不登校児童生徒は増えている。1年間に公立学校の中途退学者が770名いる。ぜひ、地域ぐるみで子どもを育てるという中に、そういう子どもたちの思いも組み込んで考えていただけたらありがたい。

委員
委員
委員

フリースクールでの取組はないのか。

わずかである。

学校支援のコーディネーターをしている。学校になかなか行きづらいうちに子どもに刺激や情報を与えているのだが、登校できていない状況だ。一方で、民生委員や主任児童委員もしている。県の主任児童委員部会の方でも、各地域ごとに部局と連携してケース会議を開催したり、登校刺激ができるように見守りをしており、表には出ないが水面下で日々努力は続けている。しかし、子どもの問題だけではなく、背景にある家庭も支援をしなければならない状況が多く、先程の数が子ども数だけでなく、家庭数だと思っていただきたい。そういう現状を知っていただきたい。そして、現状としては一つの方向性だけでは支援できない状況になっている。

担当の中に完全不登校の子どもがいる。兄弟もほとんど不登校である。学校と連携をしながらいろいろな方向性を探っているのだが、まだ登校はできていない。私自身、力不足を感じることもある。地域では日々そのような状況が起こっている。

一方、地域が声をかければ登校できるのかということもそうでもない。美咲町では、津山市と包括的な連携ということで、津山市の適応教室に美咲町、鏡野町も通うことができるようになった。行政的な広がりではできつつあるので、そこには期待したい。地域のいろいろな人が力を注いでいるが、現実の数は増えているという状況だ。

委員

(7ページ) NPO法人だっぴのところに、若者の社会参画とある。中学校の97%が高校進学をしている中で、目が届きにくいのが中学校におけるキャリア教育だ。子どもたちがたくさん仕事を体験する中で、自分の適性に合った仕事が見つかるかもしれない。しかし、なかなかそういうチャンスがない。子どもが大人の仕事を知る、経験する、技術を学ぶような社会教育関係団体がうまれてきたらありがたい。子どもたちのキャリア教育に対する受皿としての社会教育もどこかで考えていかないといけない。教育委員会は一生懸命やっているとは思いますが、現場と空回りしている。

委員

NPO法人ちみちだが、地域の人を「大人の達人」と呼び、親子で仕事体験をする事業をしている。2時間で仕事を知るとするのは難しいので、大人の仕事に対するエネルギーを知ってもらおう体験プログラムを2年間で40から50くらい実施している。それを踏まえて、今年度は総社市内の小学校6年生にキャリア教育として、どんな仕事をどういう形でしていくか、4回授業を行った。子どもたちは今ある仕事ではない仕事を見つけてくれた。また見に来てほしい。まだ試作段階なので、県と連携して仕組化したいと思っている。

委員
委員

具体的にはどんなプログラムがあるのか。

山陽新聞で新聞記者をしたり、国土交通省で共同溝を見学したり、神社の宮大工、瓦職人、和菓子など個人事業から国の事業まで幅広く

- 委員 やっている。子どもたちも喜んで参加している。学校に行きづらい子どもも保護者が連れてきて参加するケースもあった。
- 委員 山陽新聞の受けうりだが、オーストラリアのテーフという技術を訓練する学校がある。高卒でないと入学できないというハードルがあるが、言いたいのは小中の時代から仕事に触れるチャンスをもっと作っていいのではないか。
- 委員 人権の相談を受ける中で、不登校をひとくくりとして考えてはいけないと感じている。原因もわからない。例えば、発達障害をかかえる子どもが不登校と関係しているケースもある。いろいろな面から専門家を交えて個別の分析をして不登校をとらえていかないと対応ができない。
- 委員 公民館でも発達障害の相談会をしているが、学校に行きづらい原因はいろいろあると思う。すこやか育児テレホンにもそのような相談が寄せられていると思うが、大きくなって仕事の場がないということも保護者は心配している。また、最近、性的少数者、LGBTの問題もあって、中高生くらいになると学校に行きづらいということもあると聞いている。相談員もそのような視点をもっているとは思いますが、相談員や学校の研修でも取り上げてほしいと思っている。
- 委員 不登校にも様々な要因があるので、状況に応じた対応が指摘されたと思うが、事務局で補足はあるか。
- 生涯学習課長 発達障害や不登校は生涯学習部門だけではなく、学校教育部門とも連携して取り組んでいきたい。社会教育関係団体とも車の両輪として考えているので、しっかり連携していく。
- 委員 地域のいろいろな方々が問題意識をもって取り組んでくださっているので、社会教育として機能できる形ができればいい。

(2) 平成29年度予算案について

- 一括説明 中本生涯学習課長
- 質疑応答
- 委員 新規事業で、公民館、NPO・地域団体に委託とあるが、どこが最初の発議をするイメージか。
- 生涯学習課長 市町村教育委員会を想定している。
- 委員 県が呼びかけて募集するのか。
- 生涯学習課長 そうである。これから市町村教育委員会、公民館へ働きかけようとしている。中山間の活性化に向けて課題意識をもってもらい、考えていただくよう働きかけるところだ。
- 委員 地域団体から市町村教育委員会へ働きかけてする方が早いのでは。
- 生涯学習課長 それも考えられる。
- 委員 今回の新規事業は、昨年の研究成果が出たということか。どの部分に評価が出たのか。
- 生涯学習課長 中高生が役割や出番を持ち、活躍することで、将来地域を担う人材になることが期待されるということを知事や財政当局が理解してただいたということである。
- 委員 研究した甲斐があったということか。
- 生涯学習課長 大いにあった。
- 委員 公民館の方は、生涯学習審議会からの提言からか。
- 生涯学習課長 それもある。

3 協 議

(1) 調査研究について

委員 一括説明

事務局 補足説明

委員 モデル実践だが、なぜそのようなテーマになったのか。

事務局 校長先生と協議して決めた。

委員 目指す子ども像を共有していくことが重要だという意見が出たのだが、コミュニティスクールを導入しているところは共有できている。連携から協働へのステップとしてモデルを考えている。その時に子どもも協議に入る場合、話しやすいテーマを設定して計画しているところだ。地域の実態や学校長の思いも大切にしながら進めていきたいと考えている。

委員 モデル実践で、学校主体、NPO主体とあったが、地域主体はないのか。

事務局 モデル実践としては、なかなかすべてをするのは難しいが、事例やヒアリングを通して調査研究をしていきたい。

委員 NPO主体でモデル実践をさせていただく。NPOで子どもに関連して活動しているところはたくさんあるのだが、実際つながりやネットワークをつくるとか、子どものビジョンを共有することができていない状況だ。過去に体験活動をテーマに集まって、コラボレーションが生まれたこともあるが、次につながっていないところもあったので、今回は少しモデルとして研究していきたい。

委員 NPO会館を利用している団体同士で定例的に会議や情報交換とかはしていないのか。

委員 していない。何かの課題でネットワークができつつあったり、これからつくろうかというような動きはあったりする。子ども食堂のネットワークがあるが、子ども食堂をしようとしても、子ども食堂だけのネットワークだけではできないと思う。課題は別だが、それぞれの強みを活かしたり、つながる仕組みがないと進んでいかない。それぞれが別々に事業をしているイメージがある。

委員 岡山のNPOの名簿一覧があったように思うが。

委員 登録名簿はある。子どもは社会の中で育っているもので、それぞれ自分のところは一生懸命やっているが、いろいろなところにつながっていく中で解決していけることも多いのではないかと思う。

委員 岡山市子どもセンターは、なぜ平成28年度の地域パワーアップ事業に入っていないのか。

委員 案外、県の情報が少ない。取りにいかないといけない。県の会議や研修に参加することで情報をいただくので、子どもの活動に活かしていける。それを伝えることで、他の人にも厚みや広がりが出てくるのではないかと考えている。

委員 よく遊べば遊ぶほど、学ぶことが多い。意外と遊びをテーマにした取組が少ない。

委員 数は少ないが、プレーパークを開催していると不登校の子どもたちが来て、大人からいろいろ学んで技術を身につけている実情もある。やはり子どもの居場所づくりは地域でたくさんあった方がいい。

委員 今回、提言をまとめるだけでなく、社会教育委員のメンバーがアクションを起こしていこうという動きは重要なポイントだと思う。岡山は、案外他の活動を知らなかったり、活動を結集できてなかったりするものが弱点ではないかと思う。本日参会の社会教育委員が結集してや

ってみようという主体的な動きは、社会教育委員の委員としての活動への提言、社会教育委員の在り方にも他の自治体や市町村へも一石を投じることになると思う。ぜひ、専門部会の委員の方だけでなく、他の委員の方も協力いただいてアクションを起こす。そのことも検証していきたいと思っているので、御協力をいただきたい。

委員

岡山県青年団協議会である。仕事のかたわら活動をしている。しかし、地縁団体が次の担い手がない、働きながらという環境で思いがあっても活動ができないという現状があり、仕方なく衰退していつている状況がある。各世代の居場所は地域に残していく必要があると感じている。県の生涯学習課に連絡室を作ってください情報交換会をしているが、働きながら活動しているということで、各地区の支援者が地域に必要だと感じている。例えば公民館の場所であったり、NPO団体や企業と連携をしながら身近な応援者も必要。働きながらということで行き詰っている現状だ。新しいプログラムも取り組みたいけれど、そこまでの余力がない。できることをやっというこことしている。そのあたりで細かな地域単位でつながる仕組みやアイデアがあれば教えていただくと活動しやすい。

委員

歴史がある団体は、いろいろな意味で継続が難しくなっている。働きながら活動していくことの難しさをどう乗り越えていくか。公民館や各団体と地域でつながっていくのは難しいのか。

委員

鏡野町の事例では、合併後も地域活動を盛んに行っている。例えば、雪かきをして高齢者を助けたり、夏の盆踊りを企画して、故郷に帰ってくる場を残していたりなど、このような好事例を若い世代に伝えていく活動をしていけばいいのかと思っている。青年団のもともとの活動は、評価を受けずにやっというこことしている現状なのではないかと思う。衰退していると必要ないのではないかというイメージがついているのではないかと思うが、今一度どうして立ち上がったのか、どうして若者が残してきているのか、歴史あるものを見つめ直し、伝えていく活動をしていく。

委員

都市部ほど活動が停滞しているのかもしれない。地域の祭りもできにくい状況なので、子ども会や他の団体に頼らないといけませんが、県内で団体がどういう現状なのか、知らない部分もある。もう少し伝わってくるという。

委員

平成28年度主要事業の報告や平成29年度予算案を聞いて、新規事業はいいと思う。ぜひ継続して事業を進めていただき、この事業で体験した子どもたちが、岡山で活躍するまで追いかけてほしい。仮に支援をしなかったらどうなのか、したからどうなったのか、追跡してみることが予算を投じた意義だと思う。社会教育はテーマが広いので難しいかもしれないが、一人でも二人でも岡山に帰ってくる子どもがいれば成果だと思う。一方、予算も有限なので、この予算だけでまかなえることは限られており、選択も必要である。本日話題になった不登校も取り上げにくい案件ではあるが、岡山県の課題であるだけにやることに価値がある。夢さがしの事業などに予算を投じて細かく分析し、その結果、不登校の子どもが少なくなれば成果だと思う。

委員

新規事業は限られたスパンで終わることが多いのだが、できるだけ継続して地域に残って活躍してくれる次の世代を育てていきたい。そして、不登校の問題も社会教育がかなりかみ合わないと感じにくい。意見を拝借しながら地域が盛り上がっていけばいい。山陽新聞で連載している「Lの時代」も今のところは、なぜ東京中心になったかということに絞られているが、今後は話題も膨らんでいくのだろう。

委員 たまたま本日も私の記事が掲載されているが、次は価値観の転換、その次はふるさと教育の方向へ進んでいく予定である。発想の元は、昨年までのこの会議のテーマである。やかげ学、倉敷南高校などの取組も踏まえ、ふるさと教育の動きも取り上げていくので、引き続き注目していただきたい。全体としては、「脱東京一極集中」がテーマである。

委員 子どもをもつ親として、子どもの安全が大事。親が地域に入っていくとした時、子どもをどう守るか、地域の高齢者をどう守っていくのかを考えた時に「防災キャンプ推進事業」があったと思うが、子どもたちが主体となって、地域に災害が起こった時にどう自分たちが動いていくのか、高齢者をどう誘導していくのかを考えることも地域を愛する気持ちを育む上で大事だと思う。岡山県は災害が少ないので、防災意識が低いのではないかということを知った。逆に東北の知り合いは、6年前の東日本大震災の経験があるので、地域の連携ができていると聞く。観点は違うかもしれないが、安全、防災も軸に子どもを参画させていければ、中高生も比較的入りやすいのではないかと思う。

委員 地域によって防災を手掛けているところもあると思うが比較的少ないように思う。たしかに、防災意識は中四国の中でも岡山は低い。どの地域においても考えておかなければならないことだ。

(2) その他 特になし

4 閉 会